

報 告

大岩弘治助教授の逝去を悼む

上 坂 一 郎

京都大学結核胸部疾患研究所細菌血清学部門の大岩弘治助教授は昭和50年2月8日医学部附属病院において食道癌のため、将来ある生涯を閉じた。

同氏は大正12年7月7日の生れ、昭和19年9月に京大附属医専を卒業、終戦まで短現の軍医として勤務したが、終戦後、昭和21年9月に研究員として当研究所に入所した。以後、副手、医員、助手を経て、昭和42年10月に助教授に任ぜられた。

同氏は研究の初期、即ち昭和24年頃までは当時、驚威的な発見であったペニシリンを始めとする抗生物質の作用機序の検討を行っていたが、その頃より結核菌の研究に専念するようになった。

まづ結核菌の抗酸性の細胞壁における所在を光学顕微鏡と電子顕微鏡との対比から明らかにし、続いて結核菌の毒力に関して、本菌には溶血作用と白血球遊走阻止能力があり、それが毒力と関係のあることを明らかにした研究は注目に値する新知見であった。

最近十数年は結核菌と近縁の癩菌の研究に専念し、鼠癩菌を用いて、いまだ培養不可能とされていた同菌を酵素活性のあるマウス脳新鮮抽出液を培養液に加えることによって、肉眼可視集落を始めて作ることに成功したのである。

更に近年は癩と癌の関係に着目し、鼠癩死菌を頻回 C3H/He 雌性マウスに注射することによりマウスの乳癌発生を低率に抑制し、且、その際マウスのレプロミン反応が著しく増強されること即ち乳癌の抑制と遅延型アレルギーとの関連について示唆に富む成績を得ている。

同氏は当研究所においては助教授として後進の指導、育成に当り、その温和な人柄はつねに後進者や同僚から尊敬されていた。又、日本癩学会評議員として学界の運営にも貢献してきた。

このたび、かかる優れた学究をその独創的な研究の途上失なったことは、惜しみても余りあるところである。ここに深く哀悼の意を表しその御冥福を祈るものである。